

杉原下総守家と四番衆杉原氏について

— 杉原信平系の惣領家に関する考察 —

中世史部会

木下 和司

【資料①】「康正二年造内裏段銭并国役引付」

① 杉原新蔵人殿 参貫文 備後国草原（小原）村段銭

② 杉原美濃守殿 九貫六百文 備後国父木野四ヶ所分段銭

③ 杉原因幡守殿 六貫五百七十九文 備後国信敷名立職段銭

④ 杉原彦四郎殿 拾貳貫三百七十五文 備後国木梨庄段銭

⑤ 杉原千代松丸 八貫二百八十五文 備後国三原浦并高洲口分

⑥ 杉原左京亮殿 五貫文 備後国杉原本庄段銭

※康正二年は、一四五六年

【資料②】「相原行勝讓状」（「高洲長左衛門盛英書出」）

譲与

備後国高洲庄、同國竹名、彦五郎光忠所讓渡也、但國竹名、

福田太郎一期之間者、不可有違乱煩候、仍為後日讓状如件、

応永三十四年十一月十九日

行勝 判

※応永三十四年は、一四二七年

【資料③】「東山殿時代大名外様附」

（今谷 明著『室町幕府解体過程の研究』所収）

四番 次第不同

畠山中務少輔 同刑部少輔 同十郎

（中略）

杉原因幡守 同下総守 宮上野入道

同若狭守 同又次郎 同近江守

（中略）

土岐肥田判官 杉原千法師 同中務丞

同三郎左衛門尉 同左京亮 同太郎法師

（後略）

※明応元（一四九二）年から同二年の成立

【資料④】「下津屋信秀他二十九名連署状」

（羽田 聡氏「足利義材の西国廻りと吉見氏」）

栗飯原三郎左衛門尉、依窮困及餓死之儀、昨日十六日遁世仕候、

対 上意申、更無別心緩怠通、以書状申入候由、相番中へ申置候、以

御憐愍可然様、被思食計候者、各忝可存候由、以御取合御披露可畏入

候、恐々謹言、

八月十七日

下津屋次郎

信秀（花押）

玉井弾正忠

益信（花押）

「他の連署者二十八名を略して、表1に示す」

（宛所欠）

【表1】

下津屋左京亮近信	久下駿河守政光	杉原因幡入道善賢
小早川兵部少輔元茂	金山三郎	杉原下総守盛平
宮又三郎真信	宮小次郎実信	大和次郎左衛門盛忠
萩野三郎光豊	高孫次郎師定	萩宮内少輔貞利
大和彦太郎秀邦	高山孫三郎重久	杉原美濃守盛重
藤民部駿河入道宗栄	藁科左京亮貞清	杉原与四郎忠平
宮若狭守貞兼	佐野又五郎孝綱	高山六郎五郎重秀
杉原平次郎忠良	宮弥太郎貞盛	宮彦次郎親孝
杉原次郎光盛	東宮内少輔師胤	大和佐渡入道永存
多喜新藏人資徳		

※明応七（一四九八）年から永正七（一五〇六）年の間に成立

【資料⑤】「親元日記」文明十三（一四八二）年三月十七日の条
一杉原伊賀殿被申、同名備後國同名面々知行分所々事、依御成敗、
大略被打渡之間、且為祝儀御禮、五百疋自國面々中、杉江方へ渡之、

表書	書状連判
彼状面 盛平	盛平 判
裏書三人	盛秀 同
大和次郎左衛門尉	忠世 同
杉原四郎	清康 同
杉原太郎左衛門尉	盛恒 同
	豊平 同
	忠昭 同

【資料⑥】「足利尊氏袖判御教書写」（「梶原文書」）

（足利尊氏）ノ

御判

下 梶原又次郎為平

可令早領知備後国木梨庄地頭職之事、

右人為勵功賞、所宛行也、者守先例可被沙汰之状如件、

建武三年三月四日

※建武三年は、一三三六年

【資料⑦】「足利尊氏袖判御教書写」（「福山志料所収文書」）

（足利尊氏）ノ

御判

下 杉原彦太郎信平

可令早領知備後国本郷庄木梨庄地頭職事、

右以人、為勵功之賞所宛行也、任先例可沙汰之状如件、

建武三年五月廿日

【資料⑧】「足利義持御判御教書」（「梶原文書」）

（足利尊氏）ノ

（花押）

備後国木梨庄地頭職半分、伊多岐社地頭職半分、杉原保内知行分
残郷地頭職半分、并福田浜田事、当知行の旨に任せ、杉原文太郎
光貞同一族等領掌相違あるべからざるの状件の如し、

応永三十年十二月廿三日

※応永三十年は、一四二三年

【資料⑨】「足利義材御判御教書写」（小早川家文書）
元来写也

御判 「義材 後義尹、又義植」

備中國々衙 広橋家本役有之 田村越後入道跡・倉光次郎跡・越前国志都部郷長井太郎知行・備中国浅口 細川民部少輔知行・石見国吉賀上下領付野上下・備後国木梨庄梶原下総守同名修理亮知行并梶原三郎左衛門尉跡等事、云馳参正覺寺陣、云越中国供奉、忠節之条、為勲巧之賞、所宛行也、早吉見右馬頭義隆領掌不可有相違之状如件、

明応四年七月廿八日

【資料⑩】「細川澄之力書状写」（小早川家文書）

備後国木梨庄杉原下総守知行分三原之事、為請本領、可有御知行候、對吉見右馬頭御判写進之候、然者、正税頼之事、執沙汰肝要候、萬一於無沙汰者、可改易候也、恐々謹言、

十一月一日

九郎

小早川小法師殿

※永正三（一五〇二）年の書状と推定

【史料⑪】山名是豊書状（「高須惣左衛門書出し」）

為千代松殿御名代、從最前被令出陣、極在陣中連々御粉骨、誠異于他覺候、并千代松殿御忠節候、毎々雖致注進候、愚身参洛事候間、弥具可達上聞候、仍其御事直可有御帰国候由承候、心得申候、然ハ千代松殿御事、早速上洛可目出候、恐々謹言、

十二月廿四日

是豊判

杉原駿河守殿

※寛正二、三（一四六一、二）年の書状と推定

史料⑫】太田垣美作守書状（「高須直衛書出し」）
上紙二有之

「杉原中務殿 御宿所 太田垣美作守」

就御身上之儀、此間太郎左衛門尉殿へ申上候儀御心得被分候ハ々無為儀目出候、殊高須三ヶ村事候間、駿河守殿御一期已後者貴所へ可有相談由、如此駿河殿以書状承候間可然候、彼御状肝要儀候間進之候、恐々謹言、

文明拾貳年

十一月廿四日

判

杉原中務丞殿 御宿所

※文明十二年は一四八〇年

【史料⑬】『系図纂要』所収「梶原系図」

【史料⑭】犬橋満泰書状（『増補訂正編年大友史料』）

御札委細令拝見候、抑御座所乱妨事、当手之事者、猶可申付候、奉公面々者、貴所より被仰候ハん事、可然候、就中御計策之事、大友申候、事行候様ニ御了簡肝要候、毎事期面謁候、恐々謹言、

二月廿六日

満泰（花押）

（景臨首座禅師）

上使御待者御中 御貴報

【史料⑮】『看聞日記』永享八（一四三六）年六月十四日の条

抑聞今月一日於備後大内少式合戦、大内方多被討、備後国人當方討死云々、公方奉公者也、此間注進云々、

【史料⑬】太田垣胤朝副状（「平賀家文書」）

備後国之儀、可為如先々旨、屋形及度々雖申下候、山内新左衛尉以下背下知之条、可加退治之由被申出候、就其屋形以直札被申候、宮上州・杉原又太郎方被仰合、急度一途候様御武略可為本望候、猶委細同名次郎右衛門尉可令申候、恐々謹言

（永正三年）

（太田垣）

十一月三日

胤朝 判

平賀藏人大夫殿

※永正三（一五〇二）年の書状と推定

【史料⑭】山名澄之書状（「高須惣左衛門書出し」）

急度申候、仍就幡州重而進発之儀、但州從宿老中可馳走之由申下候間、則雲州申遣候處、同心之条、因但同时可相動候、其國被閣諸弓矢之儀、此趣但州申上候、猶委細兩人可申候、恐々謹言、

（大永二年）

（山名）

七月十九日

澄之 判

杉原又太郎殿

※大永二（一五二二）年の書状と推定

【史料⑮】大内義興書状（「高須惣左衛門書出し」）

雖未申通候、以次染筆候、仍宮上野介每事被相談、一味御武略肝要候、尚陶尾張守可申候、恐々謹言

（大永七年力）

七月十九日

義興 判

杉原左衛門尉殿

※大永七（一五二七）年の書状と推定

【史料⑯】木梨陸恒書状（「高須直衛書出し」）

杉原本郷之事、子細候て我等申付候へ共、御めいわく承候間進之候、可有御知行儀、旨儀ハ以面申承候間不能子細候、恐々謹言、

三月十九日

陸恒 書判

高須中務太夫殿 御宿所

※大永年間（一五二一〜八）年の書状と推定

【史料⑰】大内氏奉行人連署書状（「浦家文書」）

就神辺相原豊後守同意之儀、當城無油断由注進之通令披露候、辛勞之由被成御書候、誠御面目之至候、彌馳走可為干要之由候、猶隆兼可申候、恐々謹言、

十二月廿二日

興滋（花押）

隆著（花押）

隆満（花押）

乃美小太郎殿

※天文十五（一五四六）年の書状